

社会構成主義に学ぶ：  
なぜ今、主体的・対話的で深い学びなのか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 満 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/00028708">http://hdl.handle.net/10098/00028708</a>

## 社会構成主義に学ぶ

なぜ今、主体的・対話的で深い学びなのか

西川 満

### I. はじめに

将棋棋士という職業がある。史上最年少の14歳2か月で棋士になった藤井聡太七段<sup>1)</sup>が最近よく話題に上がる。藤井七段は2016年12月のデビュー戦から翌年の6月まで連続29回勝ち続けそれまでの連勝記録を見事に更新した。スター棋士の誕生である。それ以来気にかけて応援観戦するようになりネットで放映される将棋番組をよく観るようになった。

40年ほど前、アマチュアの将棋大会によく出ていたころは新聞の将棋欄が重要な情報源であった。真剣勝負の一局が数手ずつに分割され、棋譜とその解説で一週間ほどの連載記事となっていたため、次の一手を考えながら翌日の新聞を心待ちにしていたことを思い出す。ここ数年は、インターネットを通してLIVEで真剣勝負の様子を見ることができるようになった。さらに驚いたことに最近、画面の上方に「評価値」なるものが表示されるようになってきた。

A 7段	42%	対	58%	B 5段
------	-----	---	-----	------

のようなイメージである。プロ棋士が長考を重ねて指した一手に対して、瞬時にAI(人工知能)が形勢を評価し表示してくれるのである。

パソコンが個人で買えるようになったころ、将棋ソフトはまだまだ弱くて初心者の方が十分に務まった。むしろパソコンはインターネットを通して同好の士と将棋を指すことに役に立っていた。その後コンピュータの性能が格段に向上し、プログラミングの技術が飛躍的に進化して、このところアマチュアはもちろんプロ棋士でもほとんど勝てなくなっている。コンピュータの情報処理能力は人間をはるかに凌いでいること、疲れを知らずほ

とんどミスをしないうちから勝負にならなくなってしまった。そういう状況で昨今はプロの棋士同士の対局のLIVE放送の画面に失礼にもどちらがどの程度優勢なのかAIが計算し瞬時に表示するわけである。プロ棋士も、若い人を中心に対局以外の場ではAIの形勢評価値を参考にしてこれまでの定石にとらわれない新手を考え出したり、作戦の幅を広げたりと活用するようになってきているようだ。

将棋は二人で棋譜という一つのストーリーを創り語るゲームである。しかし、2台のコンピュータが対戦して何億通りの棋譜を創り出しても観戦するファンはまれであろう。そもそも、その高性能なコンピュータでも、未だどんな対戦相手にも形勢判断で「100%」を必ず出し続けることはできないでいる。絶対に真という理論はまだ見つからず、勝ったり負けたりしている状況である。コンピュータ以上に人間はミスをする。ミスをする人間同士が、こう表現したいという大局的な意図をぶつけ合い、その関係性で新しい棋譜を、新しいストーリーを作り上げようとするところに、観戦する者の心を引き付ける魅力があるように思える。果たして、これからもプロの将棋棋士という職業は存続していけるのであろうか。

ケネス・J・ガーゲンの「あなたへの社会構成主義」を読んでいて、メタファーという言葉に出会い、ふと思いついたストーリーである。メタファーとは、理解を深めるためのストーリーといえる。

### II. これまでの学び

#### 1. 教師教育研究の振り返り

「数学とは何か」「なぜ数学を学ぶのか」と問い始め

たのは、もうずいぶん前のことである。自分がそう考え始めたのか、数学を学ぶ高校生らがそう尋ね始めたのか、それとも情報化・グローバル化が進み、大きく変容していこうとしている社会がそう問いかけてきたのかはわからない。答えを得ようと機会を得て現場を離れ大学院で研修を積む中で、P.J. デービスらの「数学的経験」という本に出会い、書かれている多くの内容は難解であったが、求めている方向だと感じ実践してきた。

県立学校を退職し、福井大学教職大学院に職を得て、高校教員というコミュニティから、これからの教育を考えたいこうというコミュニティの一員になり、再び「なぜ学ぶのか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」について考えるようになった。

これまで5年間の、教師教育研究の概要は以下のとおりである。

#### 8号 校長講話を通して数学観を育てる

高等学校の数学科教員として長年にわたる授業実践と、福井大学の修士課程での「数学とは何か」「なぜ高校生は数学を学ぶのか」についての研究考察から、生徒それぞれの数学観を育む授業作りが数学に対する学習意欲を生み、学力を向上させるとの指導理念を確立し、長年自信をもって授業に取り組んできた。最後の5年間に取り組んだ校長講話を通して生徒の数学観を育て、教員の授業観を揺さぶる試みについて実践を振り返り書き留めた。

#### 9号 学校を変える～勝山高校の挑戦～

ミドルリーダーの立場で取り組んだ学校改革の実践について書き記した。勝山高校に赴任し学級担任、教科担任、学年主任、進路指導主事、部活動顧問の立場で学校を活性化させるべく、授業を変える、総合的な学習を変える、教育課程を変えることなどを目指し、チームで苦悩しながらアイデアを出し合い議論し実行することを繰り返して学校を変え新しく創ってきた7年間について省察し後づけしている。

#### 10号 学校は変わる～大野高校の挑戦～

学校長としての立場で取り組んだ学校改革の実践について振り返り書き記した。生徒数の減少期を迎え学校の統廃合が進められていた。平成21年に校長として着任し、平成23年度からの奥越地区の県立高校の再編整備計画の実施に向けて、再編後も大野高校が奥越地区の中核的な進学校として責任を果たし、地域社会の期待に応えることができるよう、学校改革を推進し教育内容の充実を目

指した3年間について省察しまとめた。

11号 ナラティブの視点で事実行為としての懲戒を変える  
校長として、文部科学省のアンケート「高等学校における生徒への懲戒の適切な運用について」を受け、問題行動を起こした生徒への指導、いわゆる事実行為としての懲戒のあり方について研修に取り組みていねいな指導を心がけてきた。ナラティブの視点に立って、人が問題なのではなく問題が問題なのだという姿勢で対処し、児童生徒が新たな可能性を見つけ問題を解決していけるような指導の在り方について考察しまとめた。

#### 12号 ナラティブの視点と算数・数学の学び

～新たな数学観というストーリーを育てる～  
「数学観を育てる授業」、「ナラティブでの Agency」、「主体的・対話的で深い学び」の三者が根っここのところで繋がっているのではないかと考察を始め、社会構成主義という考え方が関わっているように思えてきた。自分で課題を見つけ考え話し合いながら、様々なディスコースに気づき、自分なりの目的や価値観、オルタナティブ・ストーリーをつくっていく学びと言えるのではないかと結論を得た。

#### 2. 社会構成主義が気になる

教師教育研究12号の「ナラティブの視点と算数・数学の学び」について、その後のFDのグループセッションで、次のようなメモを作り話してみた。

---

#### ○数学観を育てる授業について

**プラトン主義の数学** ⇒ **数学観を育てる授業**

「真偽は明らか」 ⇒ 「間違えてもよい」

「答えがある」「不変なものである」

⇒ 「話し合って決めよう」

「宇宙は数学で表現されている」

⇒ 「数学は人間が作った神秘的なもの」

「数学は存在する」 ⇒ 「人間研究の一部」

---

テーマ「数学観を育てる授業について」では、数学の諸対象は客観的事実として実在し人間の知識には全く依存しないもので、数学者は何も発明できない、発見するだけというプラトン主義から、数学は人間が作った客観的実在あり、人間の意味を扱う人文科学の1つであるので、文化の文脈でのみ理解可能である。そして、数学は間違え

てもよい、間違えたら訂正が可能であるとの結論を採用した。教師が「数学とは何々である」と教えるのではなく、生徒自身が各々で考え、話し合い、経験しながら、それぞれが自分の数学観を育て、数学を学んでいくように授業を仕掛けていくという結論を得た。

その12号で、「 $\pi$ の小数展開を試みたときに、連続して100回0が続く部分があるかどうか」を想定したブローエルの実数の例を挙げて、がまん出来る時間内には「真か偽か」「正か、負か、それとも0か」が決定できない命題が作れることを述べ、プラトン主義への反例とした。

$\pi$ の小数展開について、ネットのニュースで最近の状況を知ることができる。2019年3月14日の $\pi$ の日に、Googleが円周率の計算でギネス世界記録に認定されたと発表した。計算された桁数は31.4兆桁で、新たに9兆桁分を更新した。この記録を作ったのは、日本人エンジニアのEmma Haruka Iwaoさんで、計算には25台のGoogle Cloud 仮想マシンにより、96個の仮想CPUと1.4TBのRAMで行い、計算に111.8日かかったとある。残念ながら、0が100個連続しているところはまだ見つからないようである。

#### ○ナラティブ・アプローチについて

##### 支配的ディスコース

時代・地域・文化に応じて、コミュニティの考え方、価値観、言葉の意味付けをする。

⇒ **オルタナティブ・ストーリー**を見つける。  
物事の本当の真実は存在せず、ただそのことを語るストーリーが存在する。

「学校へは行くべき」⇒「学校に行かなくても」

「時には体罰も」⇒「体罰は絶対ダメ」

「男は…」⇒「男も…」

ナラティブ・アプローチでは、物事をどのように理解し、考えていくかは、その人のパーソナリティ(どんな人物か)によるという考え方を否定し、その時代、その地域、文化に所属する集団によって共有されるディスコースによって物事を理解し考えていくとする。支配的なディスコースに反して行動することはとても難しい。見方考え方を換え自分自身にとって好ましいディスコースを選択していく力をエージェンシーと呼ぶ。エージェンシーを仮定するからこそ、生徒たちが自らの手で主体的に「現実」を作り変えられることを、そして対立を乗り越えるこ

とを期待できる。

#### ○主体的・対話的で深い学び

##### これまでの教育

教師が自分の正しい知識を学習者にコピーする。

「覚えておきなさい、テストします」

「将来必ず役に立ちます」

⇒ **主体的・対話的で深い学び**

いろいろなディスコースを疑い、主体的にオルタナティブ・ストーリーを作る。

私は、「数学観を育てる授業」から、「ナラティブ・アプローチ」を経て、「主体的・対話的で深い学び」へと自然に繋げていた。これらのメモの中の「⇒」の矢印に当たるものが、「社会構成主義」という新たな考え方への脱構築と位置付けられるような気がしてきている。数学の例えでいうならドーナツとコーヒーカップが位相同形であるとイメージする感じだろう。

「ネットでちょっと調べたところ、社会構成主義は本質主義との対立から生まれたもので、デリダは脱構築を主張し、社会の本質的な現実、社会現象や意味は、人間が作り上げたものにすぎないと主張。この立場では多くの社会現象は具体的に分析不可能となるなどと批判されているとありました」と言葉にしていた。

#### 3. ガーゲンの「あなたへの社会構成主義」

続きが気になっていたところ、ガーゲンの「あなたへの社会構成主義」の本を紹介され早速ネットで注文した。だが、どの販売店も品薄のようになかなか手に入らずますます興味がわいてきたという次第である。

ここからは、この本を通してガーゲンと対話しながら社会構成主義について学び、ガーゲンの社会構成主義を通してこれまで実践してきた「数学観を育てる教育」や「ナラティブ・アプローチ」等について振り返り、これからの教育の在り方について考えを深めていきたい。

さて、私は、これから、適切な物語を述べることを求められている。「適切に語る」とはどういうことだろうか。四つの特徴をそろえていることとガーゲンは述べている。①説明されるべき出来事や到達すべき事態など、「収束ポイント」が設定されていること。②収束ポイントを説明するようなできごとを述べ、関係のないことに言及しないこと。③順序は一般に時間に沿った並べ方がよく用いられる。④理想の物語は、それぞれのできごと

がその前のできごとと因果的に結びついてなめらかな語りになっている。例えば「王が死に、そして女王が死んだ」でなく「王が死に、そして女王が悲しみのあまり死んだ」がちゃんとした物語の始まりになる。生徒の状況やこれまでの学習の流れも十分に知らずに生徒の学びを見取りその授業を評価しようとする参観者のために書く「学習指導案」の気配りに似ている。

「I.はじめに」でメタファーという言葉は初めて使ってみた。例えだとわかる「夢のような物語」という表現に対して、「悲しみに心が張り裂けそうになる」と表現することがメタファーとされてきた。「青い空が広がる」は対照的な表現で事実を述べていると考えられるかもしれない。しかし言語はそのコミュニティの伝統や文化によって認められたものなので、「青い空が広がる」と表現することもメタファーと考えられる。「青い空」の後に「が重い」と続くとはだれも予想しない。また、日本では「green signal」のことを「青信号」と表現するわかりやすい例もある。そして、どんな語りもメタファーであり事実そのものではないとなる。

この本の翻訳者は、「言説」という言葉を使っている。私は「ナラティブ・アプローチ」以降「ディスコース」と表現してきたので、これまでと同じように「言説」を「ディスコース」と表現していく。また、「共同体」との表現も同様に「コミュニティ」と表現する。

次の2つのことが気になっている。まず「社会構成主義に至る時代的背景について」である。何故、社会構成主義がこつ然と現れたのだろうか。次に「ガーゲンの社会構成主義の考え方」である。合わせて、ガーゲンは社会構成主義への批判にどのように答えたのだろうか。III章で時代的背景について、IV章でガーゲンの社会構成主義について、この2つを収束ポイントとして、ガーゲンの語りを聴き自分なりにまとめてみたい。

### Ⅲ. 社会構成主義に至る時代背景について

#### 1. 啓蒙主義の時代

私が育った戦後の日本のある農村では、農繁期には「百姓の子が勉強などしていないで仕事手伝わんか」と言われ、農閑期には「これからは百姓では食べていけない、しっかり勉強せ」とどやされたものだ。秋の稲刈りの季節には夜半刈り取った稲をはさにかけて終わるまで「はしかい」

思いをしながら、ひたすら下から稲わらを放り上げる手伝いをした。田畑に雪が降ると大人が縄をなったりむしりを編んだりしている横で、板の間に座り少し安心して本を読んだり宿題をしたりできた。学校では、戦後、日本国憲法ができ民主化が進められ、農地改革、教育改革などが行われたと教えられた。蛍雪の功という言葉が他人事には聞こえなかった時代である。汗をかいて働くことはとても充実していた。暗い蝋燭のもとで本を読むことに夢中になっていた。親や教師の言うことは正しく、「知識とは何か」とか「本当に正しいのか」とかは考えず、テキストを疑わずに頭に叩き込んでいた。ただ、なぜか急ぎ立てられているような感じがしていた。1960年前後の思い出である。

ガーゲンは1935年生まれ、1957年イエール大学心理学部を卒業、1962年デューク大学心理学部で博士号を取得、ハーバード大学助教授を経て、1967年からペンシルバニア州スワースモア大学心理学部の助教授、1971年から同教授、2006年退職。この本は1999年に書かれた『An Invitation to Social Construction』を翻訳したものである。なお、1993年に「タオ・インスティテュート(The Taos Institute)」の設立にかかわり、現在は会長として社会構成主義にもとづく実践に取り組んでいると紹介されている。

さて、ガーゲンの語りを聴こう。デカルトは1637年「方法序説」の中で、あらゆる権威、常識、感覚さえも疑うことを示したが、自分が疑っているということだけは疑うことができないと述べ、思考こそが人間であることの核心をなすものだと考えた。「我思う、故に我あり」は有名である。それまで、ヨーロッパの一般の人々は、長い間独裁制の下で労働を行ってきた。国王の、教会の圧迫を受け、人々は自分の運命を自分で決められないでいた。暗黒時代と呼ばれている。デカルトの登場によって、そういう暗黒時代から啓蒙主義の時代へと大きく変わっていった。「一人一人の人間は、世界をあるがままに観察し、適切な行為について判断できる」との主張から、個人という概念が明確になった。自分自身を観察する能力と、自分の行為について考え、評価し、判断する能力とが、個人という概念に付与されたということである。近代的な自己概念の誕生である。

啓蒙主義時代の自己概念は、今日でも、ヨーロッパはもちろん、それ以外の国でもあらゆるところに浸透している。民主主義、公教育、自由と平等々々である。私たちは、主体的に思考し判断する能力、自らの将来を自分で選択する自由を非常に重んじている。しかし、これらは、過去の優れた著述や政治闘争、戦争などの結果として他者か

ら与えられたものである。自己概念には、まだまだ疑いの余地があるとガーゲンはある。

## 2. 二元論的存在論

ガーゲンはアメリカの大学の心理学部教授である。私は、教員 OB で福井大学の教職大学院の客員教授である。生い立ちも、言語も、所属しているコミュニティもまったく異なっているので、ガーゲンの考えを理解することは大変難しいことだと予想している。私は、長年教師を生業としてきたので、その経験を生かして、ガーゲンを読み文脈と対話し自分なりの書き言葉にするという実践を通して、難解な理論を高校生に読み聞かせるようにシンプルな物語として伝えてみたい。

ガーゲンは自己概念にはまだまだ疑いの余地があると語った。まず「自己とは何か」について哲学者たちの考えてきたことを見てみよう。

心と世界の実在、心理的な世界と物質的な世界が実在していると考えることを、「二元論的存在論」と呼んでいる。このことは明らかに正しいように思えるが、非常に難しい問題である。心と物質との因果関係をどう説明することができるだろうか。

例えば、「思い浮かんだ面白いストーリーを忘れないようにメモしよう」という考えがどのようにワープロのキーボードを打たせるのだろうか。考えが電気信号を発生して腕の筋肉を動かすのか。心がどこからか電気信号を生じさせるのか。心は物理的なものではない。

心が物質的なものにどのように影響を与えるのかは現在もうまく説明できないでいる。そこで哲学者たちはいろいろと考えを巡らす。「世界はただ一つ心の中に存在する(一元論)」としたり、「一人一人が閉ざされた私的な世界に生きている(唯我論)」と考えてみたりした後、「物質的なたった一つの世界が存在する(唯物論)」にたどり着く。しかし、ああでもないこうでもないと考えている心がやはり確かにあると元に戻ることになる。だいたい物質的な物が主体的に自己判断できるだろうか。人間はロボットではない。

「内的な主観的世界」と「外的な客観的世界」があるとすると、どのようにして客観的世界の知識を主観的に獲得するのかも大きな謎である。哲学者たちは考え続ける。経験主義を主張する哲学者は、心が「自然に対する鏡」の役割を果たし、世界を体験することで知識を得ると考えてきた。しかし、「公正」「民主主義」「神」などの抽象的な概念はどうやって生まれてくるのか説明できない。経

験主義に対抗して合理主義者が、数、因果関係、時間などの概念は生まれつき備わっていると主張する。またまた残念ながら、例えば「主体的・対話的で深い学び」のようなこれまでにない概念はどのようにして登場するのかと問われると説明できない。

知識の問題は、鏡としての心というメタファーによってうまく定義することはできない。思い切って二元論的なメタファーによって定義することをやめれば、うまくとらえ直すことができるかもしれない。

## 3. 自分の心が本当にわかるのか

「考える」という心の状態について考えてみる。「考える」と例えば「悩む」とはどう区別するのか。「考える」に色や形、重さはあるのか。心のどの部分の様子を見てどの部分で考えるのか。血圧、心拍数などの生理学的な指標で表せるのか。本当に考えているとどうしてわかるのか。他人と同じように考えているとどうしていえるのか。本当に自分の心がわかるのかと、二千年の間、哲学、心理学、生物学において考えられてきたが答えはいまだ得られていない。

「外界についての知識が個人の心の中にある」ということはどうも疑わしいと思われる。自分は「客観的知識」を有していると知識の特権的地位を主張する学者がいる。客観的知識とは、現象を正確に観察し、観察したことを正確に報告することができるということだろうか。しかし、心は自然を映し出す鏡であるとみなす考えが怪しいうえに、心がそれ自身の内容をどうやって知るかともわかっていない。心の中が分からないなら、真理や客観性という概念も非常に不安定なものとなる。これらのことについて、どのように理解すればよいのだろうか。

ガーゲンはこんな話を例として出す。だんだんと社会構造主義に近づいている。

私は、目の前にある物体を注意深く観察して、「この机は、硬く、薄い茶色をしていて、重さは80ポンドで、特に匂いはない」ということを客観的真理として結論付ける。しかし、同じものに対して、原子物理学者は、「それは必ずしも硬いとはいえない(机はたくさん原子でできているが、原子の間はすきまだらけだから)」といい、心理学者は、「本当は物体自体に色があるわけではない(色の知覚は、光波が網膜に映ることによって生じるものであるから)」と教えてくれる。宇宙学者なら、「それは80ポンドの重さであるかのように見えるだけだ(重さ

は、周囲の重力場によって決まるものだから)」といい、生物学者は、「もっと臭覚の鋭い犬なら、何らかのにおいを感じるはずだ」と主張するだろう。

このように、専門家たちは、机を理解するのにそれぞれ異なる語彙を用いる。物理学者は「原子」、生物学者は「セルロース」、技術者であれば「統計的特性」、芸術に興味を持つ歴史家なら「ヴィクトリア形式」、経済学者であれば「市場価値」という語を使って説明する。それぞれの語彙は、同じ専門分野に携わるコミュニティから生まれたものである。科学的真実は、一人の人間の観察する心が生み出したものではなく、コミュニティの伝統の産物ということになる。

心の中の知識や理性という想定が疑わしいとなると、現在の教育システムの背後にある理論的な根拠にも、疑いの目を向けられることになる。これまで学校は、生徒一人一人の心の質を高めること、知識を増やし考える力をつけることに取組んできた。そして教科の内容を身につけさせ、レポートや試験の結果によって生徒個人を評価してきた。教師が生徒に、ある問題に対してどう考えるかと問えば、生徒はいくつかの言葉を並べて答えるだろう。書かれている専門的な言葉や数式が生徒の心の中の考えかはわからないが、教師は書かれている言葉を吟味して評価し成績をつける。生物の授業なら、生物学の伝統を反映した言葉が期待される。数学の授業なら、数式を使って真偽を明らかにする必要がある。合理的に考えると、生徒個人の心の中のことではなく、教師と生徒の関係の中で起きることなのだ。このことは重要である。

ゲーゲンは、一人一人の人間の内面に自己が存在し、外界についての知識を獲得するという常識に疑問を持つようになり、科学、心理、客観性、合理性、教育、道徳的選択などのあらゆる前提が疑わしくなってきたと語る。民主主義も、「一人一票」を一人一人が心の中の考えや判断で投票するという考えで成り立っている。いったん自己という概念が疑問視されると、社会的な伝統の骨格をなしているものがごとく揺らぎ始める。

#### 4. 文化帝国主義

ゲーゲンが、かつて日本の大学を訪問した時、ある年配の日本人教授が、感じている寂しさと孤独について打ち明けてくれたと語る。終戦後にアメリカが日本の大学をアメリカ式に改革した。改革以前は、教授全員で一つの大きな研究室を共有していたのを「遅れている」と考

えてそれぞれに個人の研究室を与え閉じ込めた。それまでは、一緒に話をしたり笑い合ったりしていたのに、今ではもうほかの教授と話をすることもほとんどなくなったというのである。自分たちの信じる真理、理性、道徳という概念が普遍的なものであると考えられている。そして、知らず知らずのうちに、ほかの現実を信じる人々を西洋文化は抑圧しているのである。

デカルトから始まった啓蒙主義は、王族や宗教が押し付けた全体主義的なルールを壊し、「社会の基本的な単位は個人である」という個人主義的な考え方を広めた。そして、教師は個々の生徒の評価は行いが、生徒と教師がどのような協力関係を築いたかを評価しようとは考えないでいる。生徒にとって学校とは自己実現の手段であって、コミュニティを維持していくために何をしなければならぬかに関心を持たず、自分の利益になる進路を選択しようとする。さてその先はどうなるだろうか。すでに、個人の利益のために天然資源はとりつくされ多くの動物の種が絶滅してきた。これからも地球は持続可能な発展を続けられるのだろうか、それともゲーゲンのいう「ごみの惑星」になってしまうのだろうか。

#### 5. ポストモダンによる批判

いよいよ、新しい考え方、ポストモダンの登場である。ポスト基礎づけ主義、ポスト啓蒙主義、ポスト経験主義、ポスト構造主義とも呼ばれている。ポストとは「その次の考え方」というような感じであろうか。ポストモダンの登場のきっかけは、学問の世界に起きた次の三大事件の結果であるとゲーゲンは語る。

##### 第一の事件

**言葉は、現実をありのままに写しとるものではない**

例えば種田山頭火の「まっすぐな道でさみしい」という言葉でどんな寂しさが伝わるだろうか。「言語とは何か」という基本的な問題が見落とされてきた。言葉は世界のできごとや事物と対応するはずだと確信してきたが、まず自分の個人的な経験を他者に正確に伝えることはできないとなった。さらにはある言葉が正確に何を指しているのかを決定することができないと結論付けられた。「言葉による指示の不決定性」という。

例えとして、西川満という名前を聞いた人が、泣き虫のねんね、病気がちな小学生、マラソンの得意な中学生、内緒のアルバイトで学費を稼いでいた高校生、二輪で北海道を一周した大学生、…、のどの人間を思い浮かべるのかわからないで如何。

## 第二の事件

### 価値中立的な言明など存在しない

推薦書を書くときによく考えて、「大変な努力家で優秀である」「統率力があり人望が厚い」「創造性に富み将来有望である」等と書くことは本当に客観的といえるだろうかと問う。私も、どの生徒に対しても希望する進学や就職への夢が実現するように、思いを込めて、推敲を重ねて書いてきた。推薦書の言葉はその生徒に対する個人的な思い入れが書かれていたと言える。客観的だったかは怪しい。

中立的な真理を主張するであろう科学者、学者、裁判官、宗教的指導者などのあらゆる権威の言明が、「イデオロギー批判」の対象となりうる。言葉は世界を正確に写し取ったものでなく、利害や関心からある特定の説明を選ぶように仕向けられている。自然科学でも、例えば生物学のテキストの中には、女性の体が子孫を残すことを第一の目的とする「工場」のように思わせる表現がみられる。

## 第三の事件

### 記号論から脱構築へ

言葉と世界を結びつけているものは、社会的慣習に過ぎない。デリダの「言語的脱構築」理論では、①すべての有意味な行為(合理的な決定をする、重大な問題に良い答えを出す)は、「ありえたかもしれない多様な意味を抑圧する」ことによって成り立つ。「家の跡取りは地元の教育学部を出て教員になる」という伝統文化のことであろうか。②すべての決定は、合理性の根拠を突き止めていけば必ず崩壊する可能性をはらんでいる。道徳の授業のモラルジレンマの例のことであろうか。

デリダは次のような例を挙げている。「宇宙は物質から成り立っている」とすると、人間も物質的存在である。ところで、「物質」という言葉の定義は、「物質」でないもの、「非物質」つまり「精神」があるので意味を持つ。あれ、おかしい。

小さい子はよく聞き続ける。「民主主義って何」「全体主義や君主制でないもの(差異)」「君主制でないものって何」「自由で平等なもの(差延)」「平等って何」「不平等でないもの」「…」、いつまでたっても事実に出会うことはできない。

さて、デリダの難解な理論をわかりにくいなあと思いつつもながらもガーゲンの語りを通して聴いてきた。そして、

個人の心の中に、知識を獲得し、合理的判断を行う「自己」があるという信念、モダニズムの中核をなす信念が、ゆるぎないものに見られていたが非常にもろいものであることが分かってきた。「正当性の危機」である。

モダニズムの伝統の持つ危険性を取り除き、良いところは残しながら、それらを再構築する方法を見つけなければならない。

## IV. ガーゲンの社会構成主義

### 1. ポストモダンとしての社会構成主義

哲学者たちは、人々が自分の運命を自分で決められずに国王や教会に従っていた暗黒時代から、「一人一人の人間は、世界をあるがままに観察し、適切な行為について判断できる」との主張で、啓蒙主義の時代へと変えた。人々は誰もが民主主義や公教育、自由と平等などの恩恵を受け自分の夢の実現に向かって邁進している。伝統や文化、道徳などが尊重される小さな社会集団において、啓蒙主義の幸せを全員が分かち合えるうちはそれでよかった。しかし、科学技術が進み情報化社会の到来とともに、狭くなった地球上でコミュニティ同士の利害が衝突するようになり、地球の資源はとりつくされ、環境が汚染されるようになってきた。

哲学者たちは考える。本当に啓蒙主義的な自己概念は正しいのか。物質世界と心の世界という二元論的世界はどうも怪しい。ヘルシュ「数学的経験」の物語にあったのを思い出す。物質的「世界1」がある。非物理的な意識の「世界2」がある。そして進化の更に進んだ過程で現れる「世界3」がある。個人の意識とは種類の違った社会的な意識、伝統、言語、理論、社会制度など人類の非物質的な文化の世界である。この新たな世界を考えるべきではないかと物語は進んでいるように思える。

ジャック・デリダは1930年生まれのフランス人で、ポスト構造主義の代表的哲学者である。デリダの主張した社会構成主義は、「社会現象や意味は、人間が作り上げたものにすぎず、社会の中には本質的な実在はない」と主張した。ラディカルな社会構成主義とここでは表現しておく。ラディカルであるためにあまり支持されずすたれていったようだ。ここにガーゲンが登場し、ソフトな社会構成主義を展開しているように思える。ガーゲンはどう主張したのであろうか。

### 2. 4つのテーゼ



「社会現象や意味は、人間が作り上げたものにすぎず、社会の中には本質的な実存はない」にショックを受け、「真理などどこにもないのなら、私たちはどうやって合理的な決断を下せるのか」「何が善いことがわからずに私たちは何をすればよいのか」とガーゲンの授業に出ていた学生が質問したエピソードが書かれている。この疑問を大切にしながら、ガーゲンの社会構成主義についての語りを聴いていこう。

社会構成主義は、自己、真実、客観性、科学、道徳などを、すべて無効にしておもうとしているのではない。それらをどのように理解し、実践してきたかに疑問の目を向け、そうした過去から明るい未来へと再構築しようとしていると語り始める。

「テーゼ」は、数学でいえば「 $n$ 次方程式は $n$ 個の解を持つ」という「代数学の基本定理」のようなものだろう。ただし、結論ではなく、今のところうまくいっている仮定であり、そこから対話を始めるためのきっかけであるとしている。

#### テーゼ 1

私たちが世界や自己を理解するために用いる言葉は、「事実」によって規定されない

言語は、世界をありのままに写し取るものではない。いかなる状態に対しても、無限の記述や説明の仕方がありうる。私たちが世界や自己に関して持っている知識が全て、他でもありうるということで、性役割、人種、宗教などのカテゴリーや理解の呪縛から解放してくれる。

「学校へは行くべき」⇒ 「学校に行かなくても」

「ナラティブ・アプローチについて」のメモの一部分を思い出す。文部科学省の通知もあり、最近是不登校の児童生徒が新しい学びの場を選択することも可能になってきている。

#### テーゼ 2

記述や説明、そしてあらゆる表現の形式は、人々の関係から意味を与えられる

世界や自己にとっての事実であるとみなしているものは、決して個人の「心」の産物ではない。意味は、人々の関係の中で、人々の同意、交渉、肯定によって作り出される。人間と自然との「関係」も無視できない。言語や文化、歴史によっても制限を受けている。

私は孫がおもちゃを放り投げると「大好き、ぎゅー」といいながら抱き寄せることを続けている。孫は、私との関係では、「大好き」の言葉はまずい行為をしたとき

に発せられる意味も持つととらえているかもしれない。

#### テーゼ 3

私たちは、何かを記述したり説明したり、あるいは別の方法で表現したりするとき、同時に、自分たちの未来をも創造している

私たちの伝統、自己、真理、道徳、教育などは、人々が共に意味を生成していく絶え間ないプロセスによって維持されている。過去によって決定されているわけではない。もし何かを変えたいと願うなら「活動的な詩人」になって、新しい意味を、「生成的ディスコース」を生み出そうと努力しなければならない。

私は小さいときに母から「言葉には言霊が宿っているから、いい言葉を使うようにしなさい」と教えられ、うそをついたり、人の悪口を言ったりはしないようになってきた。良いテーゼだったと今思っている。

#### テーゼ 4

自分たちの理解のあり方について反省することが、明るい未来にとって不可欠である

大切な伝統を維持しながら、新しい未来を創造することは容易なことではない。「何が事実か」「何が善いことか」について、人々の間に既に暗黙の合意ができていて、それ以外の可能性は最初から否定されてしまっている。社会構成主義では、「自省 (reflexivity)」を、つまり、自分が持っている前提を疑問視し、「明らかだ」とされているものを疑い、現実を見る別の枠組みを受け入れ、さまざまな立場を考慮して物事に取り組む姿勢がとても大切だと考えている。

私が、ある高校のプロジェクト委員会で学校改革についてメンバーと話し合っていた時のことを思い出す。私は普通科をA、B、Cのように習熟度別編成にすることは、それまでの経験から生徒の不評を買い失敗すると決めてかかっていた。しかし、若い教員の「やってみましょう」の言葉で案を作成したところ、生徒・保護者は意外にも理解を示してすんなり実現した。今年度の高校入試の状況を見ると、何校かの普通科が定員割れとなったのに対して、どの高校の探求科も人気が高かった。普通科から探求科へというのが時代の流れ、社会の要請となってきた。当時は「普通科」というディスコースに縛られ、校内でできる工夫で済ませたのである。あの時、探求科という可能性をもっと追求しなかったことを今自省するばかりである。

これらの4つのテーゼはそれほど難しいものではないが、そこには深い意味が秘められている。社会構成主義は、学問の世界の伝統的な区別、例えば、知るものと知らざる者、教師と生徒、教養のある者となない者との区別を揺るがせつつある。

「主体的・対話的で深い学び」のメモにあるように、教師は、「正しい答え」を知っている権威者で、板書したものを「ノートにとって覚えてきなさい。明日試験をします」というスタイルの授業をこれまでやってきた。しかし、どうして「正しい」とわかるのか、どうして「知る」ことができたのかを疑ってかかれというわけである。「伝統的に正しいとされてきている、先輩教師がそう教えてくれたから知ることができた」では、疑いは解消しない。

### 3. 社会構成主義を語るガーゲンの言葉

ポストモダンの主張は確かに重要なものだが、それで終わりではない。それは、きっかけを与えてくれたに過ぎない。社会構成主義にもとづく代替案を大切に育んでいけば、モダニズムの伝統の持つ危険性を取り除き、良いところは残しながら、それらを再構成する方法を見出すことができる。

4つのテーゼをもう一度、自分の言葉でTheseとして列挙しておく。

These1：事実に対していろいろな説明の仕方がある。

These2：事実は人々の関係から意味付けされる。

These3：別の意味を生成し未来を創ろうと努力する。

These4：理解のあり方を自省し明るい未来を創る。

これで簡潔に理解できるような気がする。ガーゲンが社会構成主義について語った別の言葉をいくつか選び、もう一度聴くことで理解を深めてみたい。

These1：事実に対していろいろな説明の仕方がある。

世界の本質なるものを写し取る、唯一の正しい言葉やグラフ、あるいは画像などは存在しない。いずれも構成されたものであり、科学的に見ても、社会的な価値という点から見ても、可能性と限界の両方を有している。

社会構成主義は、対抗するすべての立場、例えば実証主義のような立場に対して、我こそが真実だと主張することはない。どんな伝統や生き方にも一定の価値と理解可能性があると考え。生徒が主体的に学ぶ姿と重なる。

These2：事実は人々の関係から意味付けされる。

社会構成主義は、「事実」や「善」の起源を、社会的なプロセスの中に位置づけようとする。私たちの「知識」は、人々の関係の中で育まれるものであり、個人の「心」の中ではなく、「共同的な伝統」の中に埋め込まれていると考える。

社会構成主義は、確かに「個人」よりも「関係」を、「孤立」よりも「絆」を、「対立」よりも「協働」を重視している。対話的に学ぶ姿勢が大切であると聴こえる。

These3：別の意味を生成し未来を創ろうと努力する。

社会構成主義は、伝統の声と批判の声のどちらも対話の中に招き入れようとする。社会構成主義の動きに加わるために、どちらかに凝り固まる必要もないし過去を批判的に消し去ってしまう必要もない。重要なのは、対話を持つ驚くべき可能性に気づくことだ。社会構成主義の立場に立てば、未来を創造するための新たな可能性が開ける。

社会構成主義の鋭い感覚は私たちを刺激し、これまで作り上げてきた現実の外へ足を踏み出し、さまざまな問いを発するように呼びかける。

私たちが行為のパターンを変えたいと考えている場合、ディスコースのモードを変えること、できごとの記述、説明、解釈の仕方を変えることは有効な手段の一つである。より大きな変化をもたらすためには、今ある慣習や思い込みを捨ててしまわなければならない。そうすることで深い学びが行われる。

These4：理解のあり方を自省し明るい未来を創る。

社会構成主義が目指しているのは、反省を進めていくことである。過去を振り返ることが現在の深い洞察につながるように、異文化について知ることによって、私たちは、自分との共通点と違いの両方について考えるようになる。他者を解釈することは、私たちがいかに世界を構成しているのか、それはどんな結果をもたらすのかを明らかにすることである。明るい未来を創っていくことを目標として私たちは学ぶのである。

### 4. 学校教育への代替案

ガーゲンの語りである。学校での経験は、失敗への恐怖、競争に対する憂慮、耐えがたい退屈に満ちている。こうした悲惨な経験の原因は、次の2つの前提にある。

前提1 教育の目的は無知な生徒を知的に変えること。

前提2 教育によって一人一人の生徒の心をより良いものにしていかなければならない。

ブラジルの教育者フレイレはこのような伝統的なモデルを「栄養士モデル」と呼ぶと紹介している。知は「良い食べ物」である。教育者は栄養を与える者、生徒は栄養を与えられる者である。そして、最も大きな権威を有しているのは、知の創造に携わる学者や科学者である。学者、教育の専門家、教師、生徒のピラミッド型階層構造のイメージが浮かぶ。

このモデルでは、生徒は空の容器として扱われ、生徒自身による「創造」や「革新」の可能性は抑え込まれている。社会構成主義は、このフレイレの主張を支持し、新しい教育の在り方として反省・共同の実践・多声性の3つの代替案を提示している。ここではあえて、(1)省察、(2)協働的实践、(3)多声性と表現しまとめる。

### (1)省察

伝統的な栄養士モデルでは、知は、それぞれの学問領域の中で料理され、生徒たちに与えられる。生徒は、カリキュラムによって、自分にとって異質な領域の中へといざなわれ、その領域でのやり方を習得することを強制され、見知らぬ人々によって評価される。「数学とは何ですか」「なぜ数学を勉強するのですか」などと質問することは決して歓迎されない。

社会構成主義では、じっくり考え反省することこそ最も価値のあることだと考える。権威的なディスコースに対して、そこにはどのような利点があるのか、そのディスコースが誰のものなのかを生徒自らが議論し、新たな解釈を創り出していくには、どうすればよいのだろうか考える。

ここでは反省という言葉を使っているが、他では「自省(reflexivity)を非常に大切だと考える」とある。ショーンの「THE REFLECTIVE PRACTITIONER」を「省察的实践」と訳している例もある。ここでの反省は省察と思ってよいだろう。省察とは権威的なディスコースに対して、生徒自身が議論し、未来をよくする、新たな解釈を創り出すためのものといえる。

権威的なディスコースはだれのためのものかと考えることはとても難しい。隠れた信念や価値観を教えているのではないかという「隠れたカリキュラム」批判から、「解放的教育」が行われるようになって、その教育はだれのためのものかと問われる。

伝統のポジティブな側面を生徒に正しく理解させることも必要であり、省察を通して権威的なディスコースを

疑い別のディスコースを見つけていくことも必要であると思われる。

社会構成主義は、創造的なやり取りの実践、生徒と教師、あるいはその他の人々が、共に明るい未来を切り開いていけるような実践を重視すると力強く語ってくれる。

### (2)協働的实践

本では「共同の実践」とあるが、共同募金、協同組合、協働学習と使われているので、協働的实践としておく。

栄養士モデルでは、教師が生徒に伝達すべき知を持っているとされている。だから、教師は「対話」よりも「独語」というスタイル、講義やデモンストレーションを好む。しかし、このやり方にはあまり魅力がない。情報を一方的に与えるような授業に全く価値がないわけではないが、多用することで、生徒を授業に引き込むことができなくなるだけでなく、生徒が物事を自分なりのやり方で吸収していく機会を奪うことになる。また、生徒自らが、教材から自分の周りの状況をより豊かにするようなものを獲得する妨げになる。

同感である。私は、高校「数学」に対して、定期考査や大学入試のための学習を「テスト数学」と名付け、区別して扱うようにしてきた。テスト数学の時間は、よく出る問題を選び、ていねいに説明し、繰り返し練習させる。「なんの役に立つのですか」と問わせない。一方数学の授業では、なるべく教師は黒板の前に立たずに、「生徒自身にとって数学とは何か」を考える、話し合う時間を大切にできるようにしてきた。テスト問題は解けるし、数学の楽しさも味わえるというのが高校生から支持されている。

ガーゲンは、「唯一の正しい答え」をあまり重視しない教育実践「コンセンサス・グループ」を紹介している。授業では、グループごとにその分野の定説に挑戦させるような質問に対して、自分なりのやり方で答えなさいという課題が与えられる。また、反対意見にどう対処するかを考え、グループの中で合意に達していなければならない。グループ全体が一応納得できるような点に達しなければならぬため、生徒は学問において最も高度で厄介な問題の中に放り込まれると語る。

教育が社会にとって身近なものになるように、教室と世界を結びつける授業、例えば、世界の様々な国の学校の教室をインターネットで結び、地球規模の問題について話し合う授業も提案している。現実的な提案である。

### (3)多声性

学校で分かりやすい「上手な文章を書く」よう教えられ

てきた。レポートの書き方のハンドブックにある「標準的な書き方」的表現スタイルは、いったい誰に有利なものになっているのか。社会を変革しようとする者のスタイルではなく、人々を従属的な立場に置こうとする者のためのものであろう。

社会構成主義に立つ教育研究者は、「多声性」を生み出すためにはどうすればよいかを考える。複数の声を手にし、多様な表現や物事の捉え方ができるようになるにはどうしたらよいかという案を示す。

まず、学生に標準的ではない書き方のレポートをつくらせる。つまり、あるトピックについて、ある特定の立場に立って批判的に書くよう求める。次に、同じトピックについて脱構築的に書く。最後に、論理的かは無視して、もっとトピックを自分に関連づけて書く。こうすることで、1つのトピックに対して様々な解釈の仕方を見出すようになる。現実主義的な表現スタイルから自由になり、多様な人々に対して効果的に話すことができるようになる。

わかりにくいので具体的にやってみる。まず「高校生の学力低下は、教師の指導力不足のせいである。もっとしっかり知識を叩き込むべし」と書き、「教師の持つ知識は疑わしい、よく省察し協働して学んでこそ学力が向上する」と書く。最後に「コミュニティにとって教えるべき知識がある。また、グローバルな社会で多様な人々と話し合える学力を身につけさせたい。何が教えられることで、どのようなことは学ぶべきなのかが問われていると考えている」と書くイメージだろうか。

環境保護についてのレポートを、まずは同年代の生徒に、次に環境保護団体に、そして環境保護に反対するグループに対して書くことで多声性を生み出すことができると例を挙げ語っている。

ガーゲンが続ける。伝統的な現実主義の考え方からすると、学問におけるコミュニケーションとは、事実を正確にレポートにすることであった。著者に「知る者」という合理的・思索的な人間としての高い位置を与え、読者を「無知な者」として位置づけるなどエリート主義的である。

私が大学へ入ってすぐの数学の授業で教官から教えられた次のような呪文を思い出す。当時は何の疑問も持たず、その通りノートを取りしっかりと暗記した。数学科の学生としてはとても面白かったし、役に立ったと思う。

$\forall \varepsilon > 0, \exists \delta > 0$  s.t.  $\forall x \in \mathbb{R}, 0 < |x - a| < \delta \Rightarrow |f(x) - \alpha| < \varepsilon$

「関数 $f(x)$ において、 $x$ が $a$ と異なる値を取りながら $a$ に

限りなく近づくとき、 $f(x)$ がある一定の値 $\alpha$ に限りなく近づく場合、この $\alpha$ の値を、 $x \rightarrow a$ のときの $f(x)$ の極限值と呼ぶ」と高校の教科書には書いてあるかもしれない。私は教科書のこの部分を「文学的な表現ですね、数学は文学です。気に入っています。極限の厳密な定義は大学に入って学びます」と紹介していた。

しかし、とガーゲンは続ける。社会構成主義から見ると、まず「正確に」という概念には大きな問題が潜んでいる。また、このような記述スタイルは、書き手と読み手との間に距離があり人間らしさがないという印象を受ける。学問におけるレポートとは、本来、その書き手と読み手のある関係へと引き込むものと考えている。伝統的な学問に多く見られるように「神」の視点に立つことをやめ、研究の中で、著者という血の通った人間、感情や偏見、欠点などを持つ存在を明確にすることを試みたい。

社会構成主義の対話は、ガーゲンの日々の教育実践にも変化をもたらした。教えていてももっともワクワクするのは、専門課程の学生に、典型的な「学期末レポート」ではなく、自分なりの表現方法を用いるようにという課題を与える時である。その結果、豊富なビデオプロジェクト、絵画やコラージュ、録音された音楽、ウェブサイト、劇の上演、ダンスなどが生み出されるからである。もはやたった一つの基準で、学生を評価することなどできない。人生は「前進するナラティブ」とみなせると語り息をつぐ。

## 5. 批判にこたえる

デカルトが「方法序説」で「疑いそのものを認識するところから始めよう」と呼びかけ、推論を進めていくことによって、あらゆるものに対する疑いへと導かれるが、推論しているということだけは疑いようがない「我思う、故に我あり」と啓蒙主義の扉を開けた。それ以来今日まで、「個人の心」は経験を組み立て、論理的な推論を行い、さまざまに思いを巡らす能力を持つものとして、特別な敬意が払われてきた。「みんなに追従する」ことなく、「自ら選択」し、「正しい意思決定」を行動で示し、「誠実な道徳的選択」を行う人間をほめたたえている。

しかし、疑うことは本当に「個人の心」の活動なのだろうか。「疑うことは、言語の中で遂行されるプロセスである」としたほうがよいかもしいとガーゲンは語り継ぐ。

たった一人で疑っているときでさえ、私たちは、特定の文化に根ざした話し方や書き方を取り込んでいるため、ディスコースはある個人のみには属するものではない。意

味のある言語を紡ぎ出すということは、社会的な共同実践であり、個人の心の中で生み出される言語など存在しないのである。ある言葉や行為は、その意味についての社会的な合意がなければ、言語を構成することはない。私たちに確信を与えているのは、個人の心ではなく、コミュニティにおける関係のプロセスである。「関係」がなければ、意味のあるディスコースは存在しない。意味のあるディスコースがなければ、理解可能な「対象」や「行為」はあり得ず、それらに疑いを表明することもできなくなるだろう。

社会構成主義は、私たちの「正しい」「よい」という感覚がコミュニティの中から生まれるものだと考えている。あるコミュニティにとって「客観的に正しい」こと、あるいは「よい」ことは、そのコミュニティに限定されたものである場合が多く、結果として、しばしば他のコミュニティとの間に衝突が起こりうる。そのため、社会構成主義は、自らを反省する姿勢を常に持ち続けることが大切だと考え、それを自らに対する課題にしてもいる。

ここからは、社会構成主義への批判に対するガーゲンの考えを聴きながら、自分の理解をメタファーとして語ってみたい。

社会構成主義は、

(1)物理的な世界や現実の問題をどう位置付けるか。

⇒デリダのラディカルな社会構成主義「社会現象や意味は人間が作りあげたものにすぎず、社会の中には本質的な実在はない」に対する批判であろう。ガーゲンはソフトに「何かは、単にそこにある」と述べる。ところが、何かあるのか、何が客観的な事実なのかを述べようとすると、ディスコースの世界に入ってしまうと位置づけた。例えば「地球は単にある」のだ。この大地は平らだとするディスコースがコミュニティごとに状況は違うがいろいろな形で信じられてきた。日本語の場合「地は単にある」であって、「地球」の後には「丸い」と続くのが約束事である。これでだいたいいいだろう。

(2)個人の経験の重要性や、それ以外の心の状態を否定するのか。

⇒難しい。例えば、「物」と「心」と「文化」の3つの言葉を使ってイメージする。私の幼い孫が熱い物に触れると反射的に手を引っ込めて心から泣き出す。そして、その後はなかなか触れようとしない。一方、小さな虫が肌を這うように指でくすぐっても初めのうちは何の心的反応も示さない。しかし、何度か繰り返すうちに、くすぐると身をくね

らせ笑い返すという文化を知識として身につける。やがては、小さな虫が肌を這うと払いのけるようになる。

社会構成主義は心に「何かが起こっている」ことを否定しない。心に関してのいろいろな言葉、「感情」「記憶」「意図」「善悪に関する知識」「個人」「自由な選択」などが、客観的に見て有効かどうかと問うている。「客観的」とはどういう意味かということもある。「経験した」ことについて話すには、何通りものやり方があるということを指摘している。心に関する言語が個人主義のイデオロギーに強く結びついたものであるという致命的な欠点、心理学的なディスコースをきちんと評価すると同時に、その限界に対して敏感になり、ほかの可能性を探っていくことが求められていると語っている。

(3)論理的に矛盾した懐疑主義の一形式なのか。

⇒懐疑主義は事実なるものはないと言いながら、自らの立場が正しいと主張する矛盾。

社会構成主義は、協力し合って世界に意味や重要性を与え、より多くの人に参加できる未来へと共に歩んでいこうと呼びかけている。

人間の倫理や道徳を支えると言われてきた理性を、社会構成主義では、心の中にあるものと考えず、人々の間で行われる言語やシンボル、あるいは物を用いた一種のパフォーマンスであり、常に特定の文化の中に埋め込まれ、特定の価値や生き方に深くかかわっているものであると考える。だから、あるグループにとって「正しい論理」が、別のグループでは「単なる詭弁」になったりする可能性がある。

(4)何らかの道徳的・政治的立場に立っているのか

⇒社会構成主義においては、宗教的、精神的、政治的、社会的なあらゆる価値の伝統が尊重される。とくに勝者を選ぼうとはしない。唯一絶対の価値観や道徳的・政治的理想などない。公正であること、平等、世界平和に深く関わっていかうとしている。大切なのは、多様な価値観があることを問題にすることではなく、価値の対立が広がっている世界においてうまくやっていくにはどうすればよいかを考えることである。

20世紀に入ると科学的世界観が支配的になる。科学が扱うのは「何であるか」という事実であり、人々が「いかにあるべきか」とは主張せず、科学はイデオロギーを超えたものとされた。心理学、文化人類学、経済学、政治学が大学の教育課程の主流となった。そして、1960年代に入り、権力者による弱者の支配、人種問題、所得格差、民族

対立、政治権力、男女差別、教育制度等に対する苦悩が広がる中で、科学は図らずも支配する側に立ってきた。

社会構成主義は、科学者たちに、何を「善い」と考えるのか、自らの意見をはっきり述べるよう求める。文化における意味の生成プロセスに参加し、私たちの現在、未来の生き方の創造にかかわっているからである。

(5)すべてが構成の産物であるとする、何がなすに値するのか。

⇒「人間は、客観的事実、基本的な道徳、本質的な価値に基づいて生きるべきだ」と考えると、客観的事実とは何か、絶対守るべき道徳は何か、何がなすに値するのかをきちんと把握する必要がでてくる。「宇宙は丸いのか、平らなのか」まだわからない。地域や文化によって異なる道徳観を持っている。一方、小さな子どもは「何がなすに値するのか」分かっていないと思われるが、おばあちゃんとの関係が単に面白くて「いないいないばあ」と楽しく遊ぶのだろう。私たちは、客観的な事実や道徳があると信じることをやめ、それが文化や歴史に限定されたものと理解できるようになれば、人間関係が持つ大きな可能性に気づくことができるようになると呼びかけている。

(6)対話は狭量なドグマに陥る危険があるのではないか。

⇒対話について、私はまだうまく語れないでいるが、ナラティブ・アプローチで脱構築した「人が問題なのではない。問題が問題なのだ」のことであろう。「なんでそんなことをするの」と個人の心の中を意味付けしようとするのではなく、対話を通して、人と人の相互関係がどうなっているか、争いを避けるためには関係性をどうとらえ直し新たな意味付けを見出せるかが大切なことであった。

「狭量なドグマ」はきつい表現である。社会構成主義はここまででも「唯一の正しい答え」は存在しないとしてきていることから、狭量なドグマとはなりにくい。社会構成主義は、「事実」「客観性」「自らの理解の正しさ」を主張するあらゆるものに疑いを持っている。しかし、批判には限界があると考えていて、「敵を打ち負かす」ことよりも、お互いの限界や可能性について考える、歩み寄ることのほうが大切であろうとガーゲンが語っている。

(7)明らかな自然科学の進歩をどう説明するのか。

⇒答えにくい質問であろう。確かに科学は役に立つ知識を生み出してきているように思える。

ガーゲンも、科学的なコミュニティが活動しているとき、そこに「何かが起こっている」ことを否定しようとし

ているわけではないという。しかし、その「何か」を命名し、記述する科学者の言葉が、果たして「事実をありのままに」映し出すものなのかどうかと考える。危険なのは、こうした言葉には存在する何かを「映し出す」特権があって、私たちに「唯一の現実」について教えてくれていると考えてしまうことである。社会構成主義では、多様性を大事にし、柔軟に多くの人々が科学の対話に参加できるようになることを大切にしている。

進歩、役に立つ知識、事実、特権、唯一の現実などここにいっぱい出てきた言葉が何を意味しているのか、いつも気をつけ、関係性の中でどのように意味付けされるかを考えていく習慣を持ちたい。

## V. 主体的・対話的で深い学びのストーリー

### 1. ガーゲンに学んだこと

何十年前か前、「数学とは何か」「なぜ数学を学ぶのか」と生徒が問い始めたのがこの物語のスタートであった。考えてみると、数学にも釈然としない部分があり、答えることのできない問題もある。そこで、この生徒の問いに教師が「これが唯一の正解だ」と教える必要はなく、「数学観を育てる授業」を通して生徒一人一人が自分なりの答えを見つけることが求められているのではないかと考え始めた。数学の授業では、「数学は人間が作った神秘的なもの」であり、「間違えてもよい」から自分でよく考え、話し合っって他の考え方を知り、ひょっとするとこんなふうに数学のことを考えることができると思い至るのである。いつの間にか、社会構成主義的にとらえていたのかもしれない。

「ナラティブ・アプローチ」では、人間関係にトラブルが生じたとき「人が問題なのではない、問題が問題なのだ」という気持ちで関係する者が対話を通して、そのトラブルの背後にあるディスコースを一緒に見つけ、別の可能性を探り、新しい物語を語り始めるという社会構成主義的な発想があることを知ることができた。しかし、「物事の本当の真実は存在せず、ただそのことを語るストーリーが存在する」ということがあまりよく理解できないでいた。また、このような考え方が、起きたトラブルに対してだけでなく、普段の授業や活動の中でも使えるのではと思いはじめていた。

今回の指導要領の改訂では、グローバル化、価値観の多

様化から「主体的・対話的で深い学び」を通してよりよい社会を創っていくとされている。教師主導の教え込み教育から、生徒主体の学び考える授業に変える。ペアやグループでの話し合いを取り入れて、より深く学ぶなどと通り一遍の理解しか私はできていなかったように感じる。「考え、議論する道徳」や高校の「総合的な探求の時間」で、現場はそれぞれ主体的に考え、指導法を探り、議論し、対話を活用して、より深く学ばせようと懸命に取り組んでいくと思われる。

何か大きな社会の変化、思想哲学の変化があったのではと思い始めたのは、福井大学教職大学院に来て、ここでのいくつかのコミュニティの一員になったことによる必然であろう。私が自分の頭で考え、本を購入し、読んで考え、読んで文章を書き、読んでつぶやくのは、関係性から生まれた実践なのであった。

時代は、暗黒時代から啓蒙主義の時代へ、そしてポストモダンへと進んできている。ここで「進んできている」と述べることは「価値中立的な言明」ではない。暗黒時代は国王や教会の圧迫のもと自分の運命を自分で決められなかった。啓蒙主義の時代は、近代的な自己概念が確立し、民主主義や公教育、自由と平等などの概念が与えられた。もちろん主にヨーロッパの文化圏でのことである。そして、現在は、グローバル化と価値観の多様化の時代となり、環境問題、宗教対立、地域紛争などなど地球規模のいろいろなトラブルが起きるようになってきた。本当に人間は一人一人が正しく判断しているのか、そもそも「正しい」とはどういうことなのかと疑われ始めている。

哲学者たちは考える。この世界には「心」と「物」があるように思える。物は判断しないから、心が判断しているのか。「おなかがすいた」「ねむい」ぐらいなら良いが、「 $1+1=2$ 」とどうして判断できるのかと考える。そして、社会構成主義に行きついた哲学者がいた。「知」はその人が属しているコミュニティの言語や文化、歴史などから、つまり属している社会との関係性で獲得していると考えた。而して、「唯一絶対の真」はなく、多様なディスコースが存在することになる。適当にどれかを選べばよいわけではない。対話を通して「人類が、地球が、対立するものとの関係がよりよくなる」ディスコースを選び、よりよい未来を創っていかなくてはならない。

## VI. To be continued.

一話完結シリーズのドラマで、時たま「To be continued」と文字が浮かび上がる場合がある。この教師教育研究で

も次回という機会があれば、もう少し続きを物語れたらと思っている。

ガーゲンは、言葉、記述、説明、表現という言葉の繰り返しばかり使って語っている。未来を創り出していく上で、言語が重要な役割を担っているとわかる。家族や友人との、あるいは組織の中での日常的なやり取りや、くだけたコメント、おもしろい話などからも私たちの未来は形作られる。話したり聴いたりすることについてガーゲンはどう考えているかに関心が出てきている。

学校の先生方はこれからどんどん変わっていくだろうと思う。「私は正しい答えを知っている」と生徒に教え込むことにためらいを感じるようになり、児童・生徒と共に考え、対話し、学び続ける教師像を目指すようになるかもしれない。しかし、それだけの教師ではつまらない。不易と流行という言葉もある。児童・生徒を取り巻くそれぞれのコミュニティの様々なディスコースに目を向けさせ、大切にしていけるべきものは守り、新たな物語を語り始めるべきなら挑戦を応援し見守る教師でありたい。つまり「教えるべきことはさっさと教え、学ぶべきことはじっくり学ばせる」イメージだが難しい。良い実践例がもっと欲しい。

## [註]

1) 藤井聡太七段は、2020年7月16日に棋聖のタイトル、8月20日に王位のタイトルを獲得し、タイトル2期獲得の規定により八段に昇段している。

## [参考文献]

- ケネス・J・ガーゲン 東村知子訳 (2004) 「あなたへの社会構成主義」、ナカニシヤ出版
- P. J. デービス、R. ヘルシュ 柴垣和三雄、清水邦夫、田中裕訳 (1986) 「数学的経験」、森北出版
- ジョン・ウィンズレイド、マイケル・ウィリアムズ 綾城初穂訳 (2016) 「いじめ・暴力に向き合う学校づくり」、新曜社
- 国重浩一 (2013) 「ナラティブ・セラピーの会話術—ディスコースとエイジェンシーという視点」、金子書房
- 西川満 (2019) 「ナラティブの視点と算数・数学の学び—新たな数学観というストーリーを育てる—」、『教師教育研究』第12号、167頁-179頁